

「患者の身になる」とはどういうことなのか

林 和功（茨城県立友部病院）

精神科病棟には必ずといっていいほど、看護者から問題視されている患者が数名いる。病棟生活上のルールを守らない、日中は寝ていて日課に参加せず真夜中になると起きだしてくる、些細な訴えや要求が多いなど、日ごろ看護者が困らせられている患者である。他に、拒絶的で服薬や食事・入浴をしないなどの問題を抱えている患者もいるが、いずれも看護活動がスムーズに進行することの妨げとなっている場合に問題視されやすい。

ここで紹介する三好春樹氏の『関係障害論』は「新しい老人ケアの提案」の書であるが、上記のような看護する側の一方的な視点での問題のとらえ方が、いかに患者の障害を深めていくのかについて考えさせられる。

本書で展開される「その人がどのような人であるのかを大切にする眼差し」を、人間の基本的欲求である「愛し愛されること、人に認められること、社会生活における相互依存性、自己の有用性」という「関係」のなかに重ねてみると、その人がどのような援助を必要としているのか具体的にとらえやすくなっていく。この書であげられている「関係による問題は関係で癒す」は、そのことを象徴するようなドラマチックな事例である。

5年間一歩も家から出ない寝たきりに近い脳卒中後の老人が、妻との関係だけで暮らしていた。やがて老人は妻に嫉妬妄想を抱くようになった。訪問介護者だった著者は、妻との関係が一方的で受け身的であることに注目する。それが老人の被害的な感情に陥りやすい傾向をさら

に強め、さらに「見捨てられてしまった」と一番悪い状況を先取りすることで心理的安定を図り、傷つくまいとしているのだ、と老人の思いの奥を理解しようとする。

そこで、乏しい関係を豊かにし一方的な関係を相互的な関係にするためにショートステイに通所させたり、日常的に第三者が入るようボランティアをヘルパーとして週1回依頼してみると、妄想が消退し本来の自分を回復することができた。

著者は障害や問題のある人を社会的関係、家族関係、自分自身との関係の3つの「関係」から見る。「社会的関係」は、仕事での人間関係、地域との関係、政治・宗教関係などである。「家族関係」は、情緒的な血縁を基礎とした関係である。「自分自身との関係」は、存在意義に対する自己評価である。

このように関係の中で患者を見て、関係と共に問題を把握し、その全体をイメージすることは、「患者の身になって考える」ことに通じられる。看護のもっとも基本的な態度として、ほとんどの看護者は「患者の身になる」「患者の立場で考える」という教育を受けているが、それは、関係の中で患者のニーズを適切に把握することが、効果的な看護を展開するための重要なポイントだからである。

「関係障害論」をテーマにしている本書の根底には、哲学的なまでの「老人の身になって感じ考える姿勢」が貫かれている。同時にそれは、臨床の看護者がもっとも大切にしつづければいけない課題でもある。



はやし・かずのり

社会復帰回復病棟看護長。千葉県立衛生短期大学非常勤講師も兼任している。退院し地域で暮らす元患者への訪問を5年前から続けている。林さんの読書のタイプは“じっくり派”。「読むのに時間がかかるタイプなんです。いろいろなところで立ち止まり、調べたりするのが楽しいんですね」。休みの日には自室の机で、主に仕事に関するものを読む。「いろいろな治療的試みが紹介されていますが、治るために苦痛や不安を強いていないか、看護の立場から心配しています」。